

つて可なり忠實に再現せられてある。たゞあまりに原文の文字に拘つたためか、リテラリに忠實な譯でありながら全體としての原文の意味がやや稀薄にされ、文章の中心が捉へにくくなつた箇所がないでもないようである。しかしかかる翻譯に於て譯者の自由を用ゆることに伴ふ危険を思へば譯者の態度は充分に是認す可きであらう。且前述の非難の當ると思はれるのは譯文の極めて僅少の部分であつて全體としては忠實な翻譯として信頼していいのだと思ふ。

なほ本書には附録として極めて氣のきいたデカルト略年譜と親切な譯者の附註及索引が添へられてある。(三宅朝一)

天臺宗綱要

文學博士 前田 慧雲 著

天台教家の誇りとし殆ど現存日本佛教各派教義組織の一大原因と考へられた五時八教の判釋も今日吾人のなしつゝある批評的研究の前にはその權威の幾何かを失ふ事は止むを得ざる事實である隨つてその判釋によりて以て組織立てられたる天台教理も佛教そのものの批評的研究の立場より見れば時に牽強捏造に互るの親なきにあらざる事も亦止むなき所である。然れども他面天台を自身としてその教理の高妙深奥なる事尋常普通の經論疏釋の文字音句の上に於ては到底その法義を開示し理致を釋顯する事能はざる所がある。茲に於てか天台列祖、彼等の以て佛教とし佛教精神と見たるもの、それ等の宣傳のために自己證得の法門を經論文句の上に寄せ、文字を離れずして文字外の旨趣を扶出し、言句を離れずして言句外の義味を開發せんとし、字訓、字象、轉聲等の釋に

よりて深奥の理致を手近に開示して人をして會得し易からしめ以て自家の教理を組織立てたといふ活手段の上より見れば、たとへそれに多少の牽強ありとしても實に巧妙靈活、茲に天台教理は佛教々理史上一大偉觀たるの資格と權威と永久不磨の生命とを得たのであるといふ事は疑ふ事が出来なないと思ふ。

本書は是の如くにして開創せられ、支那より日本に傳來し、日本天台を成立せしむるに至つた教理教會變遷發達の跡を尋ねその教理内容の概要を摘んで教理行果の四門を説き、教相觀心の綱要を說明し、最後に法華三大部の要領を提示し、尙初學門に入るの針路をも示され、頗る親切丁寧を極めたものである。天台宗綱要として恰好の書であると思ふ。

而してその歴史を説き、その教儀を論ずる、誠に考證該博にして適確、この種の書として動もすれば陥り易き宗派的偏見なく、第三者の地位に立つて公平に論述紹介されてあるといふ事は本書の一特長であり、讀者を利益する事の尠少ではない事を感ずるのである。

尙附録として天台教理及びその歴史に關係せしめて、佛性論、感應論、涅槃論、天台の親境に就て山外及日本天台の異説、天台念佛論の一斑、日本佛教の大系、日本天台の淵源、台密東密の淵源、讀史餘談の九種の論文を載せられてあるが、それに依りて吾人は一面天台教理を側面的に觀察する事が出来、他面他宗他派生起の顛末及び兩者關係の次第をも略ぼ知る事が出来る。余は本巻よりも寧ろこの附録に於て一層興趣多かりし事を附言して置きたい。

東京丙午出版社發行、和裝上下十二册、定價貳圓。(本田義英)